

## 6・9「熱田空襲」

全国有数の軍需工業都市だった名古屋。終戦に近い6月9日の「熱田空襲」に関心があり、関連文献を読み、現地を歩いた。

写真上左は『名古屋空襲誌』第5号。当時の愛知時計電機の工場・爆弾落下位置図である。右は『名古屋大空襲』毎日新聞社、1971年による。激しい空襲のつめ跡がよくわかる。先日



訪ねると、写真下のように、会社正面横に「慰霊碑」が立っていた。



『名古屋大空襲』から、当時の状況を再現していこう。

20年6月9日午前9時30分、空襲警報発令より早く、名古屋市真西、多度山の上をかすめて現われた50機のB29。3編隊に分かれて名古屋市熱田区千年船方、海軍軍需工場の愛知時計電機、愛知航空機熱田発動機製作所、同機体第4工作所を襲った。名古屋大空襲で初めての1トン爆弾13発など48発の爆弾を3工場周辺に集中投下して東へ去った。その間10分。ツムジ風のような空襲だった。

この朝、中部軍管区情報は、なぜか空襲警報をいったん解除した。工場外へ避難した従業員、動員学徒、徴用工員らが、ホッとして職場に帰りついたらとたんの抜打ち爆弾だった。B29が去った工場周辺は、一瞬にして地獄と化した。死者2千7百余人、重軽傷者3千数百人。犠牲者の数において愛知県下最大の空襲であり、死者の中に学徒と全国から集められた徴用工員が多かった点において、日本空襲史上の一大悲劇となった。

名古屋市民にとって忘れることのできないうらみの6・9は朝から快晴、無性に暑い日であった。市電築港線が熱田区白鳥橋で左へカーブして南へ向かったところ、市電通りの左側、堀川との間に愛知時計電機、愛知航空機機体第4工作所とが並んでいた。向かい側には、愛知航空機のエンジン部門である熱田発動機製作所。いずれも戦前からの海軍の軍需工場であった。

愛知時計電機は従業員約2万1千人。うち約1万3千人が徴用工員、約5千6百人が動員学徒だった。海軍工場につぐ重要工場として、魚雷、同発射管、機雷、爆雷など水雷部門と銃弾、信管、制動機など砲煩部門に分かれていた。

6・9まで、不思議に大きな空襲を受けなかった3工場は、たった10分間の爆撃で完

全に破壊された。いままで威容を誇った鉄骨ノコギリ型の工場は、大半が吹っ飛び、残った建物もみじめに折れ曲がった鉄骨だけとなった。

安全な避難場所として女生徒の壕に当てられた愛知時計電機の鉄筋 4 階建ての研究館の地下。いったん解除された空襲警報が、また突然発令されたとき、女生徒たちは先を争って安全な地下へ避難した。つぎの瞬間、1 トン爆弾 3 発は、4 階の屋上から地下室までをブチ抜いた。モウモウたる土煙をあげて地下室は数百トンのコンクリートに埋まった。生存者は 1 人もいなかった。何人が避難し、死んだのかいまだにわからない。工場外へのがれようとした人たちのうち、まだ遠く離れなかった多くの人たちが、工場の中で無残な最期をとげた。

この空襲は、避難の時間がなかったため、直撃による犠牲者が多く、遺体が出ない人も多かった。空襲と炎天のもとで、いつまでもわが子を求めて工場の跡にたたずむ遺族の姿はそのまま一幅の地獄図絵だった。

(2016 年 7 月 24 日)